「祇園歴史の旅」令和元年度校長だより掲載分（その３６～その５９）

学校にある資料や郷土史誌などを参考に、学校や地域の歴史を紹介するコーナーです。

祇園歴史の旅（その３６）「祇園町と祇園宮」

中部地区町内協議会設立２５周年記念誌（平成２０年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。

「古来人々が最も恐れたのは天災と病でした。特に夏に流行する疫病は、老人や子供を含む一家すべてが死に絶え、時には村が全滅するほどの痛手をこうむりました。病原菌の存在を知らない人々は、疫病を神や鬼のたたりだとして、これを祀（まつ）ったり、おはらいをして難を除けようとしました。

祇園宮は、インドで釈迦が仏法を広めた祇園精舎の守護神・牛頭天王を祀ります。仏教が中国を経て日本に伝来するとき、密教の一部として占星術に似た宿曜道（すくようどう）と結びつき、日本固有の悪霊信仰とも合体して疫神になりました。明治時代から地名をとって京都は八坂神社になったのが祇園宮です。

京の祇園祭、博多の祇園山笠など、祇園宮にちなむ悪霊退散の夏祭りは、台車を仕立てて華やかな飾りをつける山、同じく台車の上に鉾（ほこ）を立てる鉾、それに鉦、太鼓、笛の賑やかな祇園囃、神さまがのりうつる稚児行列で催されます。明治の神仏分離で祇園宮も痛手をこうむり、他の神社になったり消滅してしまいました。

佐世保の祇園町も、かつて町内に祀られていたと思われますが、その所在は不明です。祇園町の高台は、祇園尋常小学校などが立地し、近代に大きく姿を変えました。神社は原則として一村一社とする合祀令によって、おそらく須佐神社に合祀されたと思われますが、確認できません。

小佐世保川の源流近く、水利の八龍神社が祀られています。治水の八大竜王は、稲作を中心とした日本農業と深く結び着き、水不足のときの雨請い、大雨の治水を祈願しました。ここでは、神に捧げる神楽に須古踊りを奉納しており、佐世保市域では浮立（ふりゅう）が盛んな中で特別な存在です。

このほか、光月町の地名となった光月という地名も、今日では由緒不明ですが歴史を秘めていると思われます。それは、指方町にある指方庄左衛門の墓が『光月神社』と呼ばれているように、『こうげつ』と発音する漢音、さらには薬師如来の脇侍をつとめるのが日光、月光の両菩薩であるなど、光月の文字は何かいわれがあるようです。

いま一つ、町名に残っている熊野町も、敗戦の昭和二十年前半まで熊野神社として残っていました。熊野信仰は、平安時代の中ごろから、天台宗の本山派修験道の拠点となり、『蟻の熊野詣で』と称されるように、上は法皇上皇から一般庶民にいたるまで、引きもきらずに参詣した熊野三山で知られています。

熊野町も、近代化する以前から熊野権現が祀られ、地元民が御師（おし）・先達（せんだつ）と呼ぶ熊野神人（じにん）と共に熊野詣でをしたのでしょう。」

次回は、「大正時代は産業化と港の整備」と題して、大正時代の発展などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その３７）「大正時代は産業化と港の整備」

中部地区町内協議会設立２５周年記念誌（平成２０年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆

義さんの記念エッセーより抜粋。

「『軍港佐世保名も著（しる）く』と戦前の光園小学校の校歌にあるとおり、明治４５年（１９１１）に明治天皇が崩御され大正時代を迎えるまで、概ね海軍一辺倒の時代でした。大正３年、欧州で第１次世界大戦が起こり、日本も日英同盟の趣旨によって参戦、中国の青島や南洋諸島に派兵しました。しかし、主戦場のヨーロッパ各地と異り、もっぱら消耗が激しい交戦国の補給で大忙しでした。これが幸いして日本の産業は大いに伸び、国内は好況に湧き返りました。

佐世保でも、軍港とは別の民間貿易、貨客専用の岸壁が整備され、小佐世保川河口域の万津町、塩浜町が海運の拠点となりました。港湾荷役を請負う海軍会社は、太平洋戦争下の戦時体制を背景に、神戸の沢山汽船が資本参加して佐世保港湾運輸株式会社として新発足します。こうして明治末年のカンテラに照らされた夜店が名物だった山県、塩浜、万津の各町は、船具船食の会社、食堂、映画館、旅館、近海航路のターミナル設置など、民間湾港としての条件が整って行きました。高砂、相生、浜田の中心街機能はさらに南下を続け、上京、下京、京坪へと伸びてきて今日の四ヶ町商店街の原型が出来上がりました。ガス会社が生まれ、糸山銀行（親和銀行の前身の一つ）の設立、田中丸デパート（玉屋）の開業、湊町に魚市場建設、商工会議所の前身である佐世保商業団設立、米騒動を契機に各地に公設市場が設けられました。

まさに『大正時代は躍進の時代』で、その象徴的活況を見せたのがこの中部地区公民館管内なのです。『大正デモクラシー』という言葉を聞いたことがあると思いますが、民衆が個人意識に目覚め、権利を主張する大衆行動を起こす世相が顕著になったことを指しています。『米騒動』と呼ばれ、全国に広まった大衆の行動をその一例として見てみましょう。これはロシアに共産主義革命が起こり、この広がりを恐れた欧米諸国が臨戦体制をとったのに日本も呼応し、シベリアに派兵します。これを米価の値上がりの好機と読んだ大商人が米の買い占めをはかったのが騒動のきっかけとなりました。大正７年（１９１８）７月、富山県魚津で主食の米の暴騰に怒った主婦が、米問屋に押しかけて打ち壊しなど過激な行動に走り、これが全国に広まりました。一ヶ月後、佐世保でも海軍共済組合販売所だった田中丸商店に、海軍工廠の職工さんたちが押しかけました。市が困窮家庭に外国米を支給するという緊急対策をしたので、大事に至らず治まりました。

国と地方自治体は、この一件から物価対策と本格的に取組み、生活用品、食糧品などを適正価格『㊙マルコウ』で販売するよう指導、その場所として各地に『公設市場』を開設、低料金で店舗を貸すかわりに、低料金の適正なマルコウ価格で販売させるようにしました。今日まで市場街として賑わっている戸尾市場も、小佐世保川下流を暗渠（あんきょ）にして京町公設市場が設営されたのが始まりです。もう一つ、名切谷の中央にあった太田町公設市場では、階上を利用してアパートが設けられ、職住併設の“ゲタばき住宅”のはしりとなりました。

しかし、大正１０年（１９２１）ワシントン軍縮条約が成立、世の中に不況の影が濃くなってきました。１万２千人を数えた海軍工廠の職工さんも８千人台に減少、大量の解雇者対策が話し合われました。こうした動きの中で大正１５年１２月２５日、大正天皇が崩御され、『昭和』の元号と共に新しい時代の幕が開くのです。」

次回は、「昭和の時代は明暗こもごも」と題して、戦前に活躍した人などをご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その３８）「昭和の時代は明暗こもごも」

中部地区町内協議会設立２５周年記念誌（平成２０年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。

「昭和２年（１９２７）、今日の国民体育大会に当たる明治神宮大会が開かれ、１万メートル競争で佐世保の小柳早見が優勝しました。小柳は、大正３年に常盤町で開業した佐世保で初めての小児科『田崎小児科医院』の人力車夫、通称“別当さん”でした。大正時代の医師は、ほとんど往診に人力車を使い、マラソンが得意の小柳は飼い犬のシェパード次郎をお供にして走り、町の名物でした。現在も続く小柳賞ロードレース大会は、この小柳の顕彰し、記念する大会です。

田崎小児科医院を開業したのは田崎忠夫医師。養父田崎健一医師は、小児科では食べて行けないかもしれないと危惧しましたが、忠夫氏は『子供を診るのは小児科医でなければならない』との信念を堅持、苦しみながらも小児科の理想を追及されました。また、『淀川（ていせん）』の俳号も持っていた田崎忠夫氏は、大正９年に福石町で開業した犬塚赫男（てるお）［号皆春］医師らと共に句作を競い、文人医師としても知られました。　～月今宵　九十九島を浮彫りに　淀川～

行政の面では、懸案だった日宇、佐世保両村の佐世保合併が実現、人口は１３万人を超えました。また、毎日新聞主催『新日本百景・海岸の部』に九十九島が第１位となり、今日の観光立市の先がけとなります。昭和３年１１月１０日昭和天皇御即位大典が挙行され、祝賀行事が相次ぎました。この年は、戦前の名物に上げられていたエビス市が始まり、塩浜町海岸通りは集まった人々で賑わいました。春秋２回の開催は１０年間も続き、秋の八幡宮祭礼のおくんちも、お旅所を塩浜町に置いて活況を呈したものです。

しかし、世界は昭和４年１０月２４日、ニューヨーク株式が大暴落、世界恐慌が始まり、日本は前年中国での張作林爆殺事件に軍部が関与、南京での排日運動激化と、日本は中国大陸で抜き差しならぬ泥沼へと足を踏み込んで行くのです。昭和１５年は、戦前採用されていた『皇紀』つまり神武天皇から数えて２千６百年を迎え、国威発揚も兼ねて日本全国が祝賀気分に包まれました。『金鵄（きんし）輝く日本の　栄（はえ）ある光（ひかり）身に受けて　今こそ祝えこのあした　紀元は２千６百年　ああ１億の胸はなる』　誰もが紀元２千６百年を歌い、２月１１日の紀元節は全市で祝賀行事が頂点に達しました。その一方で、対米英戦必至の気分が市民にも徐々に浸透し、町内ごとに家庭防空群が結成。昭和１６年１２月８日、日本のハワイ・パールハーバー奇襲攻撃で太平洋戦争が始まりました。」

次回は、「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の２０年の私記録～」と題して、筒井隆義さんの実体験をご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その 39）「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の 20 年の私記録～」（その 1）

中部地区町内協議会設立２５周年記念誌（平成２０年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。

「前段までは、残されている資料をもとに書きました。ここからは、昭和１２年３月２５日、佐世保市高天町１１０番地に生まれた『筒井隆義』の実体験を中心に記します。

私は家の事情で、祖母筒井セツの養子として育ちました。高天町１１０番地で私を生んだ母菊枝（２２歳）は、戸籍上義姉です。記憶が残っているのは４歳くらいからでしょうか。商才があった祖母は、小佐世保川下流を板張りの暗渠にして設けられていた京町公設市場で店を持ち、のち、自宅隣家を借りて海軍さん、工廠の職工さん１０数人相手の下宿

屋を始めました。小佐世保川の右岸、峰の坂に通じる通称たいこ橋にほど近く、この川のそばが仲間との遊び場でした。橋のたもとに斉藤食堂、須藤薬局、牛木ブリキ屋、持永質屋、機織りの音がいつもパタンパタンと鳴っていた原口帯屋、山口紙箱屋、吉田洋服店、高山すし店、庄山茶舗などがある一角でした。

『ほら、こうもり傘の修繕のくるぞ』とは、イタズラ小僧の私を静かにさせる母の常套句です。当時、『こうもり傘の修繕』とふれながらやってくるおじさんは、実は人攫（さら）いで、連れて行かれてサーカスに売られる、と、私は固く信じ、心底恐れていました。このころ、軍服を着たオイチニの薬売り、鍋釜の修繕とふれ歩く鋳掛け屋など、遍歴の行商人が毎日のように通りを行き交っていました。

昭和１７年の春、太平洋戦争さなかの４月にアソカ幼稚園に入園しました。小佐世保通りを下り、現在の天津包子付近にあった西本願寺内が幼稚園舎。遊動円木の前を通って園舎に入り、冬は持参の弁当を温める保温棚に入れてくれました。

桃太郎の鬼退治の劇では赤鬼の役を演じ、遠く川棚の海軍病院まで見舞いに行き、踊りと劇で拍手喝采を受けました。そのころ、近所のくだもの屋さんからバナナが消え、お菓子屋さんのウインドーにあったチョコレートが見られなくなりました。祖母は防空演習にかり出され、母は軍需部勤めをしました。」（続く）

次回は、「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の２０年の私記録～」（その２）と題して、筒井隆義さんの実体験の続きをご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その４０）「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の２０年の私記録～」（その２）

中部地区町内協議会設立２５周年記念誌（平成２０年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。

「幼稚園を終えて昭和１８年春、光園国民学校入学。もと平戸往還の道筋をたどって要塞司令部の北を通り、石段の裏門から校庭に入ると、西側の泰安殿に向かって深く頭を下げ、石段上の教室に入ったものです。２年、３年と進級するに連れて戦火が身近になり、佐世保の上空にも銀色にきらめくＢ２９のはるかな機体と飛行機雲をしばしば見かけました。防空頭巾を持っての通学、高天山の斜面の防空壕に、空襲警報のサイレンと共に逃げ込む日も多く、昭和２０年には空襲に備えての強制疎開の対象となり、一家を挙げて１キロほど小佐世保通りをのぼった小佐世保町へ転居。ほどなく６月２９日の佐世保空襲ですべてが灰に。親子３人無傷をともかく喜び、親類と共に荷馬車１台を借り、郷里の佐賀県藤津郡塩田町へ。

小学３年生の身にとって、小佐世保町への転居と転校、空襲、塩田への避難、敗戦、年末の佐世保への帰還、須田尾町官舎跡住宅への入居、潮見小への誤転入、白南風小への再編入という慌ただしさは大変でした。唯一楽しかったことは、清流塩田川で日がな一日遊び暮らした夏休みと、家にあったおびただしい書物との出逢いと読書開眼です。戦後、祖母は極端なモノ不足のなか、再び商才を発揮して新設の戸尾市場に小店を構え、１２年間女の腕一本で一家を支えました。市場での商いはヤミ米、麦、砂糖、メリケン粉、黒砂糖、小豆などすべて統制品。朝鮮戦争の昭和２５年ごろからは、松川町に再開された京町公設市場も借り、ここを倉庫兼仮住まいとして祖母は早朝から深夜まで身を粉にしていそしみました。

白南風小から山澄中、南高校と進み、９歳から１９歳までの戦後１０年、言わば庶民生活復興の歩みを私は中心街で見聞したのです。ユニードからダイエー、そしてマンションとなっている一角は、劇場『大劇』でした。戦後の一時期、活弁と楽隊つきの無声映画を上映。時には〝実演〟として長谷川一夫ら有名な俳優もやってきました。」（続く）

次回は、「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の２０年の私記録～」（その３）と題して、筒井隆義さんの実体験の続きをご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その４１）「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の２０年の私記録～」（その３）

中部地区町内協議会設立２５周年記念誌（平成２０年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。

「記憶に残っている一つに『西部のヒーロー、ケニー・ダンカン』ショーがあります。典型的なカウボーイ姿で舞台に登場、１０m以上離れた的のナイフに、後ろ向きで鏡を見ながらピストルの曲射ち。銃声一発のあと、ナイフの刃で見事に二つに割れたピストルの弾丸を高々と上げてヤンヤの喝采を拍しました。娯楽の王座は映画、なかでも西部劇が最全盛の時代、ケニー・ダンカンは憧れのハリウッドを代弁するまさにヒーローでした。ところがところが、この一行は時流に乗ったサギ的興行で、曲射ちもニセモノ……と暴露され、みんなアッケにとられた、という後日談がついています。

夜店の商和マーケット街は、今もシューズセンターと呼ばれているように、軒なみ靴屋さん。近くの広場はキグレサーカスなどが興行する広場。佐世保の軍楽隊長、田中穂積が武鳥羽衣の詩『美しき天然』に作曲したわが国初のワルツ曲は、その哀愁ある曲想がサーカスで奏でられるジンタになり、佐世保の夜店広場に流れました。この広場はのち松竹三要という常設映画館となり、高峰秀子主演の日本初総天然色映画、つまりカラーの『カメルン故郷に帰る』が上映されました。

一帯の映画館は、千日劇場、日活、東宝中央、ニュース劇場が軒を接し、前記の京坪町大劇は東映に、京町交差点には再映館スバル座が低料金で歓迎されました。

昭和３３年、私は現在の松浦公園にあった『九州時事新聞社』に入社、１２５cc のバイクで取材に駆け回る社会人となりました。この松浦、常盤、栄の三ヶ町は、戦前は海軍御用達の大商社、『新免』など大手卸売店が軒を並べた中心商店でした。灰尽に帰した戦後、表通りは米兵の喜びそうなみやげ物を並べたスーベニアショップ、裏は外人バー街。この一角で、米兵の助言をもとに始まったハンバーガーショップが『ブルースカイ』。現在の佐世保バーガーの元祖です。玉屋デパートも焼け残った建物を修復して営業を再開、三ヶ町に代わって中心商店街の核となった四ヶ町も年を追って整備されました。外人バーから映画館へ転進したテアトルダービーは親和銀行本店前、米兵専用ダンスホールから洋画館となったカズバ、外人キャバレーから同じく洋画館となった『富士映劇』は、近くの国際映劇などと各館入り乱れてフィルムの争奪を繰り広げました。」（続く）

次回は、「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の２０年の私記録～」（その４）と題して、筒井隆義さんの実体験の続きをご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その４２）「戦前は高天町、戦後は戸尾市場～実体験の２０年の私記録～」（その４）

中部地区町内協議会設立２５周年記念誌（平成２０年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。

「戦後娯楽の代表となるパチンコも、シューズセンター通りに２、３軒。それも当初は１軒に１０～２０台機器を置いた素朴なゲーム式で、スマートボールやビンゴゲームと共に、子供も遊べるものでした。やがてオール１０、２０と射幸心をそそるものとなり、四ヶ町の表通りから地域の商店街にと広がります。昭和３３年、売春防止法施行。勝富町は昭和２７年、山県町から引越してきて６年でその灯を消し、料亭旅館として再生の歩みを始めます。一方の花園遊郭は、花園中用地ほか焼土を占領軍に接収され、太田町、宮地町、

熊野町も含めた名切谷全体が米軍住宅地として日本人オフリミットでした。
　昭和３８年、辻一三氏が市長に当選。翌３９年米原子力潜水艦の日本初寄港を契機に名切谷返還運動が盛り上がり、今日の緑したたる中央公園となります。また、旧光園小跡地の高台は米軍の子供のドラゴンスクールとなっていましたが、返還後地方裁判所、検察庁支部となりました。もう一つ、現体育文化館の地は要塞司令部の解隊後、干尽の競輪場にあった野球場を移転する用地となり、昭和２４年４月に竣工、プロ野球オープン戦などで賑わいました。名称は市民グランドでした。
　地域の歴史は、連綿と受け継がれてきた住民の暮らしそのものです。各人の胸の中に残る想い出の地に立てば、過ぎし日が脳裏によみがえります。嬉しかったこと悲しかったこと。亡き父母や友人、知人の笑顔、涙、ぬくもりと共に、今を生きて在るみんなの心の中に宿り続けています。そして、私たちの子や孫が、またこの地で暮らしの日々を持ち、あるいは新しい住民が訪れるでしょう。生々流転、世の中は変化して止みません。しかしながら、そこに住む多くの人が、この地に住んでよかったと、心の底から思えるような地域にすること。それは住民一人一人の肩にかかり、共同体としての中部地区町内協議会の役割でもあります。」（終わり）
　次号からは、佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史教育副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版から引用し、祇園小学校区及びその周辺の歴史を旅します。ご期待ください・・・。

祇園歴史の旅（その４３）「天然の良港・佐世保」

　佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。
「私たちのふるさと佐世保市は、現在２５万人もの人が暮らす長崎県第２位の都市です。佐世保市が現在のように発展したのは、市の中心部にある佐世保港のおかげとも言えるでしょう。佐世保港は十分な水深があり、俵ヶ浦半島と西彼杵半島が防波堤の役割を果たしているため波が穏やかで、港としては大変恵まれた環境にあります。
　明治時代、この天然の良港に注目した海軍が、佐世保に軍港を開いてから目覚ましい発展を遂げ、１９０２年（明治３５）に村から一気に市となったのです。最初の佐世保市は、北は梅田町、南は佐世保駅付近まで、東は烏帽子岳（標高５６８ｍ）西は弓張岳（標高３６４ｍ）までの範囲しかありませんでした。当時の面積は約１８平方㎞です。しかし現在では、合併や編入を重ねて、約２４倍の４２６平方㎞になっています。」
　次回は、「地名の由来」と題して、佐世保の由来をご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その４４）「地名の由来」

　佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。
　「『させほ』でも間違いではありませんが、正しくは『させぼ』と呼びます。この地名の由来については幾つかの説がありますが、次の２つの説が有力です。
　一つは、『サセブ』の木が起源であるとするものです。サセブとはシャシャンボという木の方言で、この木がたくさん生えていたので『サセブ』がなまって『させぼ』となったというものです。
　この木は毎年１１月頃になると、黒紫色の実を付けます。小さな実ですが、甘酸っぱく

ておいしい木の実です。
　もう一つは、中世（鎌倉や室町時代）の地名とするものです。そのころの港には、『津』が単位として付けられています。滋賀県の大津、静岡県の焼津などです。同じように、村には『保』という単位が付けられていました。そして、佐世保は佐世保川流域の狭い谷間、『狭瀬』（させ）にあります。つまり、『狭い谷間にある村』ということで『狭瀬保』（させほ）となり、これが後に『佐世保』（させぼ）となったというものです。」
　次回は、「原始古代の佐世保」と題して、市中心部の遺跡などをご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その４５）「原始古代の佐世保」

　佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。
　「市の中心部では、旧石器時代や縄文時代の大きな遺跡は見つかっていません。中心部では早くから開発が進んだため、遺跡は壊されてしまったと考えられます。そのなかで、中通町にある中通洞穴は、縄文時代の数少ない遺跡の一つです。発掘調査では、縄文時代後期（約３０００年前）の土器が出土しています。しかし、他の時期に住んだ跡がなく、遺物の量も少ないことから、ごく限られた時代に狩りなどの途中で立ち寄る程度の使われ方だったと考えられています。
　反対に、烏帽子岳の高原地域、特に青少年の天地から親子池、そして旧山手小烏帽子分校一帯には、旧石器時代や縄文時代の遺跡がたくさんあります。佐世保の地形は、低地に近い丘陵は比較的ゆるやかですが、山の中腹は急斜面や切り立った崖となり、人の生活には向いていません。ところが、烏帽子岳の高原には、なだらかな台地が広がっています。これは、数百万年前の火山活動によってできた溶岩台地の名残です。この台地には多くの動物が集まるため、石器時代には狩りの舞台となっていたのです。
　弥生時代以降、古墳・奈良・平安時代になっても大きな遺跡はありません。そのなかで、福石観音には古代までさかのぼる伝説があります。『７１７年（養老元）、名僧行基が全国遊行の途中で佐世保に立ち寄ったときに、海から引き揚げた柳の大木で仏像を彫って福石山に置いた。それが※九州七観音の一つに数えられている福石観音の始まり』というものです。しかし実際のところ、行基は九州まで足をのばしていないようですし、福石観音に現在ある十一面観音像は、１３００年代の南北朝時代のものとされていますので、福石観音の始まりもその頃と考えてよいでしょう。」
　※雲巌寺（岩戸観音：熊本市）、観世音寺（竹崎観音：佐賀県太良町、和銅寺（諫早市高来町）、田結山観音寺（諫早市飯盛町）、円通寺観音寺（長崎市）、清岩寺（福石観音：佐世保市）、堂崎観音（南島原市有家町）の７カ寺の総称。全て行基が開いたとの伝説を持っている。
　次回は、「龍神洞穴」と題して、福石観音にある洞穴をご紹介いたします・・・。

祇園歴史の旅（その４６）「龍神洞穴」

　佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。
　「福石観音の境内、丘をはさんだ裏手に大きな砂岩の洞穴があります。洞穴内には五百羅漢仏が安置され、江戸時代の終わり頃に※平戸八景の一つ『羅漢窟』として紹介されています。
　この洞穴からは、鎌倉時代頃に人が住んだ跡が見つかり、『龍神洞穴』と名付けられまし

た。土器の破片や焚火（たきび）の跡があり、土には貝殻がたくさん混じっていました。この頃、洞穴の前は海だったので、洞穴に住んだ人は、近くの磯で採れる貝を食べていたようです。龍神洞穴に人が住んだ時代と、福石観音ができた時代は近くなっていますが、もしかしたら、福石観音を創建するときに働いた人などが仮の家にしたのかもしれません。」

※「平戸八景」…平戸往還沿いの８ヶ所の名勝・奇勝（優れた景色、普通ではない変わった景色）。佐世保の「眼鏡岩」、「巌屋宮」、「羅漢窟」、「潮の目」、江迎の「潜龍の瀧」、「高岩」、吉井の「御橋観音の天然石橋」、小佐々の「大悲観」の総称。平成２７年３月に「羅漢窟」、「潜龍の瀧」、「大悲観」が国の名勝に指定された。

次回は、「戦国時代の佐世保、佐世保城と鼻繰城」と題して、戦国時代についてご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その４７）「戦国時代の佐世保、佐世保城と鼻繰城」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「平安時代の終わり頃から、長崎県北部や佐賀県唐津地方には『松浦党』と呼ばれる武士集団が現れ、地域ごとに土地を支配していました。山ばかりの地形なので、平地といえば川の河口付近にしかなく、それが津々浦々に別れているので、その地を支配する武士も小さな勢力になっていたのです。この佐世保にも佐世保氏がいました。

城山町のバス停の東にある小高い丘には、城山町の名前の由来にもなった佐世保城跡があります。丘陵の細い尾根を削りこんで背後からの敵の侵入を防ぐ「掘切」や、建物があった「平場」が残されています。また、清水中学校の裏にある保立公園も鼻繰（はなぐり）城跡といわれており、ここが佐世保城跡とする説もあります。しかし、こちらは戦前に陸軍の演習場となっていたため、遺構はとんど残っていません。鼻繰城もそうですが、特に佐世保城は「山城」と呼ばれるもので、湧き水もないことから日常の生活には向いていません。ここの城主は、普段は城の麓に築いた館で生活しており、いざ戦いとなったときに城に立て籠っていたのです。

佐世保地方は、戦国時代になると大村氏や武雄の後藤氏、そして最後は平戸松浦氏の領地になるなど、めまぐるしく土地の支配者が変わっています。そうしたなかで、佐世保城の城主も佐世保諫（いさむ）、遠藤但馬守（たじまのかみ）、赤崎伊予守（いよのかみ）と何度も変わりました。」

祇園歴史の旅（その４８）「昔ばなし～蛇島～」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「戦国の頃、佐世保城主遠藤但馬に白縫姫（しらぬいひめ）という美しい姫がいました。あるとき、飯盛城主、松浦丹後守九郎親（まつうらたんごのかみくろうちかし）が但馬館（やかた）を訪れたのですが、丹後守は姫を見て一目惚れしてしまったのです。このときすでに、姫には赤崎伊予という婚約者がいたため、丹後守の求婚を断りました。あきらめきれない丹後守は、ある夜、但馬館を襲い、姫を奪おうとしたのです。戦いが続く中、姫は館を抜け出し、将冠岳の岩穴に身を潜めました。

翌日、姫を探して丹後守の兵が岩穴に近づいたところ、なんと岩穴から白い煙と共に、真っ白い大蛇が現れたのです。驚く兵たちを尻目に白蛇は海に入り、赤崎の方に向かって泳いで行きました。ところが、その姿は途中の小島でふっつりと消え、二度と現れること

はありませんでした。人々は姫の一念が白蛇に姿を変え、恋しい伊予のもとに行こうとしたのだ、と噂し合いました。以来、蛇が消えた島を『蛇島』と呼ぶようになり、姫が隠れた将冠岳の岩穴には『岩姫様』が祀られ、館のあった中通では、なぎなた踊りと共に、岩姫様の唄が歌い継がれるようになったそうです。

昔ばなし『蛇島』では、松浦丹後守九郎親は完全な悪役として描かれている。この九郎親は平戸松浦氏からの養子で、九郎親を養子に迎えたことにより宗家松浦氏は平戸松浦氏の支配下に入ることとなった。それから間もなく、佐世保を領有していた遠藤但馬守は九郎親に滅ぼされてしまった。この事件は、佐世保の人々に新しく支配者となった平戸松浦氏に対する反感を植えつけたのではないだろうか。新しい支配者に対する反感は、かつての支配者を懐かしむ気持ちを生み、その人々の想いが、昔ばなし『蛇島』として伝わったのかもしれない。」

次回は、「江戸時代の佐世保、平戸往還（街道）と佐世保」と題して、江戸時代の往還などについてご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その４９）「江戸時代の佐世保、平戸往還（街道）と佐世保」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「１６０３年（慶長８）に、徳川家康が将軍になって江戸幕府を開き、江戸時代が始まります。これから約２６０年の間は、世界的にも珍しい平和な時代が続くのです。幕府は全国の大名を支配し、大名は領内の人々を支配しました。大名は、裁判や年貢の徴収などを行う役所を領内各地に置きました。佐世保を含む地方の役所（相神浦筋郡代役所）は、初め中里にありましたが、江戸時代末期に谷郷町に移転しています。現在の谷郷町バス停近くにありました。

江戸時代には、全国に街道が整備されました。江戸を発した東海道や中山道は、京都を経て、山陽道につながり、瀬戸内を西に向かいます。九州に入ると長崎街道となり、幕府の直轄地だった長崎が終点でした。この主要街道からは、無数の小さな街道が枝分かれして、道は全国に網の目のように張りめぐらされていたのです。

佐世保にもそのうちの一本が通っていました。『平戸往還』です。平戸往還は、江戸時代の初め頃にできた道で、平戸藩主も参勤交代などで通りました。平戸から佐世保や早岐を通り、東彼杵で長崎街道につながっていました。つまり、佐世保から江戸まで一本の道でつながっていたのです。この頃の佐世保は、往還沿いの宿場町の一つとなっていました。俵町から城山町を通った往還は、八幡神社の東側を回り、西方寺の山門前付近で、宿場の中心だった元町へ向かう道が別れていたようです。元町付近には、本陣や庄屋、寺（教法寺）、旅籠（旅館）などが立ち並んでいました。教法寺から佐世保川を渡り、相生町の旧相生市場（現エレナ）までの道は、当時の往還と同じ場所を通っています。

当時、本陣が置かれていた庄屋の山本家を訪れた、平戸藩第９代藩主の松浦清（静山）公、第１０代藩主の松浦熙（観中）公は、座敷の襖に、休息や宿泊した年月や天候、窓から見える景色のことなどを自筆しています。この襖は後に屏風に作り変えられ、今も山本家に伝えられています。当時の佐世保の様子や、大名行列の速さなどを知ることできる貴重な資料で、佐世保市の文化財に指定されています。平戸往還は、西方寺から谷郷町、中央公園の丘を過ぎ、名切の谷からさらに丘（櫨山）を越えて裁判所裏手を光月町に抜けます。そして、松川町から、この付近最大の難所である『峰ノ坂』を、山祇神社まで一気に１００メートルの高さまで登り、駕籠立て場から須田尾町の茶屋ノ坂を下って、藤原町の

一里塚に至ります。
　ところで、参勤交代の大名行列は、一日にどれくらいの距離を移動したのでしょう。山本家に残る屏風には、『朝、江迎本陣を出発して昼食を佐世保本陣でとった』という記録があります。この日は早岐本陣に泊まったと思われますので、一日におよそ３０キロメートル移動していることになります。江迎から早岐までの間には、長坂、峰ノ坂といった急坂が多いことを考えると、これはかなり速いペースといえるでしょう。」
＜コラム＞～「往還」と「街道」～
　「平戸往還」は「平戸街道」とも呼ばれている。どちらも間違った名前ではないが、正確には「往還」である。両者の最も大きな違いは道幅にある。平戸往還は道幅が１間（約１．８メートル）しかないが、長崎街道は倍の２間（約３．６メートル）の道幅がある。これは長崎街道のほうが、格段に交通量が多いためである。また、街道は荷車で、往還は馬の背に乗せる荷駄で荷物を運ぶため、街道は荷車が行き違える２間の
　道幅が必要となるが、往還は荷駄が行き違える１間の道幅で十分だったのだ。長崎街道は荷車が通るため、山を迂回する緩やかな道が多くなっているが、荷駄を使う平戸街道では、山を迂回せずに真っ直ぐ登り、下って最短距離で目的地に着けるようにしてある。そのため、急な坂道が多くなっている。
　次回は、「海軍の街・佐世保」と題して、明治時代の発展をご紹介いたします…

祇園歴史の旅（その５０）「海軍の街・佐世保」

　佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版
（改訂版）から引用。
　「江戸幕府が日本の政治を天皇に返し（大政奉還）、１８６８年（明治元）に明治維新を迎えて、日本は近代化の道を歩みだしました。近代化の中で、軍事力の強化が推し進められます。海軍では、外国からの侵略を防ぐため、全国３ヶ所に鎮守府を設置して、軍港の整備を計画しました。そして、神奈川県横須賀、広島県呉、長崎県佐世保に軍港と鎮守府が置かれました。（その後、京都府舞鶴にも軍港と鎮守府が置かれました。）
　この鎮守府設置は、簡単に決まった訳ではないようです。１８８３年（明治１６）、佐世保湾に、日本海軍の軍艦「第二丁卯（ていぼう）」が調査のため入港しました。艦長は、後に海軍の元帥となる東郷平八郎少佐でした。当時、海軍は日本の西を護る軍港を置く港を調査していました。調査は何度も行われ、その間に佐賀県の伊万里も名乗りをあげましたが、１８８６年（明治１９）に佐世保に軍港と鎮守府の設置が決まりました。
軍港設置が決まると、早速多くの技術者や労働者がやってきて、軍港と市街地を造る工事が始まりました。当時の佐世保は、海岸とそれに続く湿地が広がっていたため、大変な難工事となりました。俵町から戸尾町付近までの、碁盤の目のような市街地は、このときに計画されたものです。現在の島瀬町の親和銀行付近は、島地岳を切り崩して平地にしたものです。今日のような機械がない時代ですから、全て人力で山を崩し、掘り出した土砂は大八車（荷車）で運搬したのです。岩を切り崩すのには爆薬も使われましたが、事故が相次ぎ、８０人を超える犠牲者が出ました。西方寺の入口の崖下には、工事による犠牲者をまつる『役夫死者の碑』が建っています。『役夫』とは労働者のことです。
　１８８９年（明治２３）年３月には、鎮守府庁舎や兵舎ができあがり、翌年の４月に明治天皇を迎えて開庁式が行われました。当時の写真には、長崎から来た人たちが、現在の

総合病院の場所から佐世保川方面に、祝賀の凧上げをしているのが写っています。軍港には多くの軍人や軍艦が配備されます。そのため、軍港設置が決まると軍関係の商売などを目当てにした人たちが大勢移住してきました。多くの人が住むと、学校や銀行なども建ち、軍港を中心とした都市が発達していきます。１８８４年（明治１７）は３，８００人程度だった人口が、１０年後の１８９４年（明治２７）には１７，０００人にふくれあがり、さらに５年後には４０，０００人になっています。そこで、１９０２年（明治３５）に市制が敷かれることになりました。このときには、人口が５０，０００人を超えており、村から一気に市になったのです。佐世保の街が、いかに急速に発展したかがわかります。」

＜コラム＞～現在の市制と町村制の違い～

最も大きな違いは、国から交付される税金の額である。これは地方交付税と呼ばれ、市の財政に大きな割合を占めている。町や村はこの額が少ないため、大きな事業を行うには市のほうが有利となる。例えば、平成２４年の佐世保市の収入は約１，２５８億円で、その中の地方交付税は約２８９億円を占め、全体の約 2.3 割が国からお金が出ていることになる。ちなみに、市と町の区分は人口によって分けられており、市は５万人以上、町は５万人未満という規準がある。町は人口が５万人以上になると市に昇格するが、市の人口が減り、５万人未満となったとしても町へ降格することはない。

次回は、「佐世保要塞」と題して、軍港防備のための陸軍砲台群などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５１）「佐世保要塞」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「軍港ができるとその防備のため、陸軍の砲台群が佐世保港を取り巻くように造られました。この砲台群は「佐世保要塞」と呼ばれ、１９０１年（明治３４）頃までに、俵ヶ浦半島に３ヶ所、西彼杵半島の佐世保湾沿いに２ヶ所、そして日野町の牽牛崎と横尾町の前岳に、砲台や歩兵の砦がレンガとコンクリート、切石で大規模に建造されました。

要塞に関連して、大砲の操作、訓練を行う要塞砲兵連隊（後の佐世保重砲兵連隊）が、今の清水中学校のある場所に設立されました。清水中学校は戦後、重砲兵連隊の兵舎を校舎に利用して発足しました。また、要塞をまとめる要塞司令部が、今の体育文化館のある場所にありました。佐世保要塞は、上陸しようとする敵艦船を攻撃するための要塞でしたが、大正期になって日本海軍の戦力が充実したため、これらの砲台群は必要がなくなり、一部を残して廃止されました。造られてから１００年以上にもなるこれらの砲台は、山林に埋もれて今も残っている近代の遺跡です。」

次回は、「鉄道開通」と題して、佐世保の鉄道事始めなどをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５２）「鉄道開通」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「１８７２年（明治５）、日本の近代化の象徴である鉄道が、東京の新橋と横浜間に開通しました。その後、鉄道は全国に広がり、１８９７年（明治３０）には早岐までつながり、翌年には佐世保まで完成して、佐世保線が開通しました。やはり軍港への物資と人の移動が、鉄道を敷く大きな目的でした。鉄道開通によって、江戸時代には１ヶ月近くかかって

いた東京までの距離が、鉄道で３日程度になったのです。これが近代化の威力で、今では飛行機で数時間の距離になってしまいました。
　一方、佐世保駅より北には、中倉万次郎らが設立した佐世保軽便鉄道株式会社により、※軽便鉄道が建設されました。１９２１年（大正１０）までに、相浦から柚木、大野から上佐世保が開通し、石炭の輸送や住民の足として活躍しました。１９３６年（昭和１１）には全線が国鉄（現ＪＲ）に買い上げられ、線路幅を広げ、市街地部分の高架化を行い、国鉄伊佐線（のちの松浦線）となりました。」
　※「軽便鉄道」…線路の幅が狭く（普通の鉄道は１０６７㎜あるが、軽便鉄道は７６２㎜しかない）、小型でスピードも遅いが、鉄道に比べて安く簡単に建設できるため、明治時代に全国に普及した。
　次回は、「佐世保水道史」と題して、佐世保の水道創設などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５３）「佐世保水道史」

　佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。
　「私たちの家では蛇口をひねれば水が出ます。これは、きれいに浄化された水ですが、実は、安心して飲める水が普通に手に入るようになったのは、わずか１００年ほど前のことです。江戸時代は井戸や川の水を飲み水に使っていました。それは明治時代になっても変わりませんでした。ところが、軍港ができて、たくさんの人が暮らすようになると、水不足と、汚染された水による伝染病が、深刻な問題となりました。
　海軍でも、最初は井戸水を使おうとしていましたが、水質が悪く、水量も少なかったため、１８８９年（明治２２）に弓張岳の炭鉱の湧き水を利用して、郭公藪（かっこうやぶ）水源地と矢岳貯水所を造りました。これは、日本で３番目に古い近代水道です。さらに、１９０１年（明治３４）に岡本水源地と矢岳浄水場が完成してからは、その一部を市民が使うようになりました。それでも水不足は解消できず、ようやく１９０８年（明治４１）に海軍の山ノ田貯水池と浄水場が完成すると、海軍から水を分けてもらい、水道管を引いて市民も安全な水を手軽に使うことができるようになりました。しかし、その後も人口が増え続け、海軍からの『もらい水』ではまかないきれなくなり、市でも浄水場を造ることになりました。この工事は１９２６年（大正１５）に完成し、海軍からのもらい水でスタートした佐世保市水道は、ようやく独自の浄水場を持つことができたのです。
　山ノ田浄水場には、明治・大正・昭和の濾過池、配水池があり、２０１３年（平成２５）５月まで多くの施設が現役として使われていました。現在では濾過池の一部や砂置場、水質検査室など、明治、大正期の施設が残されており、佐世保市水道の歴史を物語る貴重な近代化遺産です。」
　次回は、「水道の父・吉村長策、ペストで焼かれた町」と題して、水道施設に携わった吉村長策とペストの発生により焼き払われた町などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５４）「水道の父・吉村長策、ペストで焼かれた町」

　佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。
　「山ノ田貯水池、浄水場と市水道の完成により、市民は初めて安全な水を手軽に利用できるようになった。このとき貯水池をはじめとする水道施設の設計を行ったのが、海軍技師・吉村長策であった。１８６０年（万延元）に大阪で生まれた吉村長策は、工部大学校

（現東京大学）を卒業後、最初の仕事として長崎市水道の建設に携わった。その後、大阪市水道、広島軍用水道、神戸市水道など次々に水道建設を実現し、１８９９年（明治３２）１２月に海軍技師として佐世保に赴任した。

着任後すぐに軍港水道、市水道の計画に着手し、１９０８年（明治４１）までに山ノ田貯水池、浄水場を完成させた。これらの水道施設は、完成後１００年以上経った現在でも使い続けられているものもあり、吉村技師の設計・施工の優秀さを物語っている。また吉村技師は水道だけではなく、海軍港湾施設建設の最高責任者として、立神係船池の設計も行っている。吉村技師は１９１１年（明治４４）に佐世保を離れた後も、西日本各地で水道建設に携わり、その優秀な設計手腕を余すところ無く発揮し、多くの水道施設を建設した。まさに近代日本における『水道の父』といえる人物である。

軍港が開かれてしばらくの間は、水道施設や排水施設も不十分で、衛生面で大変劣悪だった。軍港の建設工事中にもコレラやチフスが流行し、１８９５年（明治２８）にはコレラで２００人あまりが死亡している。特に１９０７年（明治４０）にペストが発生した下矢岳町は、トタンで囲われ町ごと焼き払われた。現在の佐世保中央インターチェンジがある付近である。焼け跡は矢岳練兵場となり、兵隊たちの訓練が行われた。」

次回は、「軍港の設備が充実する」と題して、立神係船池などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５５）「軍港の設備が充実する」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「明治の終わり頃から大正時代にかけて、佐世保軍港は、軍艦の建造や修理、さらに補給のための施設が次々に造られて充実していきました。立神町や平瀬町の自衛隊やアメリカ軍の基地にあるレンガ倉庫群はそのほとんどがこのときに建てられたものです。なかでも最も大きなものは、１９０６年（明治３９）に建設が始まった立神係船池（旧修理艦船繋留場）です。これは、二つの島を取り込んだ、縦３６３m、横５７６m、水深約１０mの巨大な構造物です。１万トンクラスの船なら、同時に９隻もつなぐことのできるアジア最大の係船池で、着工から１０年後の１９１６年（大正５）に完成しました。今から９０年以上前に、人工衛星からの衛星写真にも写る土木工事を行ったとは驚きです。係船池の周りにはクレーンも造られましたが、最も大きな２５０トンクレーンは、イギリスに特注されたもので、１９１３年（大正２）に完成しています。このタイプのクレーンは日本に３基、世界でも１３基しか残っていない貴重なもので、２０１３年（平成２５）に国の登録有形文化財となりました。」

＜嗚呼四十三号潜水艦＞

「佐世保が海軍基地となり多くの軍艦が出入りするようになると、やはり、軍艦の事故が何度か起きている。特に市民の涙を誘ったのが、１９２４年（大正１３）に起こった第４３号潜水艦の沈没事故だった。佐世保港外で行われた演習中に、第４３号潜水艦が巡洋艦龍田と接触して沈没。船長以下４５名の乗員は、生きながら海底に閉じ込められてしまった。ようやくつながった電話からは救助を求める悲痛な声が響き、救助隊は焦りを募らせたが、３０mの水深と早い潮流に阻まれて救助作業は難航し、事故発生から十数時間後、「早く、早く…」との声を最後に艦内からの応答は途絶えた。沈没から２４日後、ようやく引き揚げられた艦内には各自持ち場についたまま息絶えた４５名の遺体と、多くの遺書が残されており、見る人の涙を誘った。この事故は歌にもなり、沈没地点望む鵜渡越には白亜の慰霊碑が建てられ、永く語り継がれることになった。」

次回は、「戦争の時代」と題して、佐世保空襲などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５６）「戦争の時代」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「日本は明治時代以降、外国と何度も戦争を行いましたが、そのたびに佐世保は海軍基地として重要な役割を果たしました。特に日清、日露戦争では連合艦隊の基地となり、第１次世界大戦では佐世保鎮守府所属艦艇が遠く地中海に派遣されました。現在平瀬町にある市民文化ホールは、このことを記念して建てられたもので、１９９７年（平成９）に国の登録文化財となりました。１９２９年（昭和４）、アメリカで起こった経済不況は、世界的な経済不況（世界恐慌）へと発展しました。この不況を中国への侵略によって切り抜けようとした日本は、１９３１年（昭和６）に満州事変を起し、さらに１９３７年（昭和１２）に北京郊外での武力衝突（盧溝橋事件）をきっかけに日中戦争に突入、そして１９４１年（昭和１６）には、アメリカやイギリスを相手にした太平洋戦争へと突き進みました。

太平洋戦争でも、佐世保は軍艦の修理、補給基地として重要な役割を果たしていました。そのため、アメリカ軍の攻撃目標となり、１９４５年（昭和２０）６月２９日には、空襲により市街地の大半が消失しました。城山町から本島町付近の中心部はほとんど被災して、消失した家は約１２，０００戸、死者は１，２２７人、また怪我をしたり家を失ったりした人は約６万人に達しました。八幡町の亀山八幡神社の参道には、このときの焼夷弾の落ちた跡が点々と残されています。直撃を受けた参道や石段は砕かれており、衝撃の大きさを物語っています。また、参道脇にある石灯籠は、火災の熱で表面が剥がれ落ちています。この一連の戦争で、日本の兵士や一般市民あわせて３１０万人の命が失われ、莫大な財産をも失って、１９４５年（昭和２０）８月１５日に敗戦国として終戦を迎えました。そして、日本が起こした戦争に巻き込まれた中国、朝鮮半島、そして東南アジアや南洋諸島などでも大きな犠牲が出ました。現在でも中国では、終戦時に日本軍が捨てて行った毒ガス弾による被害が多発しています。」

＜戦争遺跡＞

「太平洋戦争が終わって半世紀以上が経つが、市内には戦争の傷跡がまだいくつも残っている。特に戦争末期になって盛んに掘られた防空壕は市内各所に数多く残っている。最大のものとしては、旧宮村国民学校の生徒たちが掘った地下教室『無窮洞』や佐世保鎮守府跡の地下司令部壕などがある。また、敵機来襲に備えて造られた高射砲台の跡も弓張岳などに残り、焼夷弾の跡も八幡神社や山ノ田浄水場に残っている。これらの戦争の傷跡、いわゆる『戦争遺跡』は、戦争の経験者が少なくなりつつある今日では、過去の戦争を後の世代に語り継ぐための教材として全国的にも調査、研究が進んでいる。」

次回は、「戦後佐世保の再出発」と題して、戦後の復興などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５７）「戦後佐世保の再出発」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「佐世保は、もともと軍港として成長した街だったので、敗戦で海軍を失ったあと、今後の佐世保をどのような街にするのかを話し合う必要がありました。そのため、戦後間もなく『佐世保市復興委員会』が結成され、さまざまな復興計画が練られました。そして、

復興委員会は、新佐世保市の進むべき道として、国際貿易港、漁業基地、平和産業都市、観光都市を示し、これらの実現を目指して、佐世保は再出発することになったのです。こうした中で、戦後、初めて公選によって選ばれた中田正輔市長は、旧海軍が残した土地や施設を譲り受けて、産業を育成しようと考えました。そこで、旧海軍の財産を市の財産とするための法律、『旧軍港市転換法』いわゆる『軍転法』の制定に向けて、かつて軍港だった横須賀、呉、舞鶴の３市とともに運動を起こしました。

中田市長は、１９５０年（昭和２５）の市議会で『平和宣言』を行って、平和商港建設に向けた決意と『軍転法』の必要性を訴えました。市民の願いと熱意により国会を通過した『軍転法』は、その年の６月に行われた住民投票で、投票率８９％、賛成率９７％という圧倒的な支持を受けて成立しました。『軍転法』にかける市民の期待は、それほど大きなものだったのです。『軍転法』の成立によって、旧海軍の土地や施設が市の学校や公園などに転用され、旧海軍工廠はＳＳＫ（佐世保船舶工業・現佐世保重工業株式会社）となりました。こうして、佐世保市が目指した平和産業都市、国際貿易港の実現に向けてようやく明るい兆しが見えてきました。ところが、やっと復興への一歩を踏み出した直後、今後の佐世保の歩みを決定付ける大事件が起こったのです。」（次号に続く）

次回は、「朝鮮戦争と佐世保、軍港再び」と題して、朝鮮戦争や日米安保条約と佐世保との関連などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５８）「朝鮮戦争と佐世保、軍港再び」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「『軍転法』が成立した直後の１９５０年（昭和２５）６月２５日、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）軍が、突然、大韓民国（韓国）に攻撃を仕掛けました。北朝鮮には中華人民共和国（中国）とソビエト連邦（ソ連）が味方し、韓国には、アメリカを中心とする国際連合軍が味方して、激しい戦闘が繰り広げられました。いわゆる、朝鮮戦争（朝鮮動乱）です。戦争が始まると、戦場に近い佐世保には国連軍の司令部が置かれ、港の施設のほとんどをアメリカ軍が使うようになりました。このため、中田市長と市民が目指した平和商港建設は、一時中断されてしまいました。その代わり、国連軍の修理・補給基地となった佐世保には、軍需物資や修理の注文が殺到しました。いわゆる『特需景気』と呼ばれたもので、この特需景気により、佐世保の街はかつての賑わいを取り戻していきました。戦争によって壊滅した佐世保が、戦争によって立ち直ったとは、本当に皮肉なものです。

朝鮮戦争が終わり、１９５１年（昭和２６）のサンフランシスコ平和条約で日本が独立を果たした後も、日米安全保障条約に基づいて、佐世保にはアメリカ海軍の基地が置かれました。そのため、たびたび原子力潜水艦や航空母艦が寄港し、そのたびに反対運動が起こっています。特に、１９６８年（昭和４３）に原子力空母エンタープライズが寄港したときの反対運動は凄まじく、全国的なニュースにもなりました。その後も反基地運動や返還要求が行われていますが、現在でも、港の施設のほとんどがアメリカ海軍に提供されたままになっています。また、１９５４年（昭和２９）には、新たに発足した海上自衛隊の基地も置かれ、鎮守府跡に佐世保地方総監部が置かれました。平和商港を目指した市民の願いとは裏腹に、佐世保は、再び軍港となってしまったのです。」

次回は、「観光都市を目指して」と題して、西海国立公園の誕生などをご紹介いたします…。

祇園歴史の旅（その５９）「観光都市を目指して」

佐世保市教育委員会編集・発行　小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』２０１６年　第６版（改訂版）から引用。

「平和商港建設と同時に、戦後の佐世保の重要な目標となったのが、観光都市の建設でした。そこで、中田正輔市長は観光の要とするため、九十九島、平戸、五島列島を含む地域を国立公園に指定しようと運動を始めました。初めは誰も相手にしませんでしたが、中田市長の熱心な運動は、やがて県や周りの市町村を動かし、１９５０年（昭和２５）には西海国立公園指定期成会が結成されました。市でも京都大学から調査団を招いて、予定地域全体の地理、歴史、風俗、産業、生物、地質の総合学術調査を行い、この報告書をもとに、一層熱心な運動を展開しました。さらに、鹿子前や弓張岳、石岳などに観光施設を整備し、ＰＲにも力を入れました。こうした努力が実り、１９５５年（昭和３０）3月１６日、政府の正式な発表により、１８番目の国立公園として西海国立公園が誕生しました。

その後、佐世保市では俵ヶ浦半島の展海峰公園や石岳展望台、船越展望台を整備し、１９９４年（平成６）には西海パールシーセンターがオープンするなど、西海国立公園、特に九十九島を活かした観光開発を進めています。２００２年（平成１４）に就航した新遊覧船パールクイーン号をはじめ、九十九島遊覧船は年間約３０万人（平成２４年）が利用しており、九十九島は佐世保の大きな観光資源となっています。これからは、この美しい自然を観光資源として活かしながらも、損なうことなく未来に残していくための努力が求められています。」（終わり）

次回は、「０周年（開校年度）の祇園小とその時代」と題して、開校年度の祇園小学校の出来事や平成１３年４月～１４年３月までの日本内外の主な出来事などをご紹介いたします…。